

阿部恒久『「裏日本」はいかにつくられたか』

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00000352

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



書 評

阿部恒久

『裏日本』はいかにつくられたか』

橋 本 哲 哉

本書の特徴のひとつは、課題の設定（序にあたる「課題と方法」）と結論（「まとめと展望」）がきわめてクリアなことである。著者自身が語る本書の構成やまとめを読むとその指摘を理解されうと思うので、最初に次の引用を通じてその構成の概略を示す。

「まず「裏日本」という言葉がいつ頃、どのような意味内容をもって使われはじめたか、とくに地域格差観念として使われるようになったのはいつ頃かという問題を検討する（第1章「『裏日本』観念の成立——明治中期の地理書にみる——」）。つぎに人口移動の分析を通じて人口の停滞と流出の始期を明らかにし、「裏日本」化がいつ頃からはじまったのかを考察する（第2章「明治中期の人口移動と『裏日本』の形成」）ことにしたい。第1・2章によって、「裏日本」がいつ頃、いかなる意味内容をもって形成されたかが明らかになろう。ついで「裏日本」形成の背景を探るため、政府の近代化政策を地域格差の形成という観点からとらえ直す作業を試みる。一つは経済的・財政的な問題で、資本主義の形成にあ

たって大きな役割を果たした殖産興業政策において、国家資本がどの地域にどれくらい投じられたかを鳥瞰し、また新潟県における産業基盤整備の問題点を検討し、地域格差が形成されていく要因を考察する（第3章「産業育成と地域格差の形成」）。もう一つは教育・文化上の問題で、新しい公教育体系の頂点に位置し、文化的権威を象徴することになる官立高等教育機関の設置状況の検討を通じ、文化上の地域格差形成の要因を究明する（第4章「日清戦後の官立高等教育機関増設問題——『裏日本』からみた——」）。つぎに、こうして形成されてきた「裏日本」社会はどのような姿であったかについて、新潟県を事例に、経済、社会関係、教育・文化状況、人口動態などを通じ考察する（第5章「『裏日本』新潟の諸相」）。……最後に、補論的に、島根県選出代議士の言説と山陰地方の鉄道敷設状況を検討し、山陰地方における「裏日本」化について考察する（第6章「山陰地方の『裏日本』化」）。

この短い要約や章のタイトルの中にも「地域格差」という言葉が目立っており、これが本書の重要なキーワードと受け止めて読むことがまず必要だろう。

ところで、本書の結論はどうか。これも非常に明快なので引用の方がやはり誤解がなからう。

各章のていねいな要約を述べた上で、「以上の6章を通して、「裏日本」の形成が松方デフレ期の1884年から91年にかけてはじまり、日清戦後の1900年頃にはっきりした形としてあらわれ、人びとに「裏日本」という差別的観念を植えつけつつ確立したこと、「裏日本」形成の基本的要因が明治政府の近代化政策にあること、また「裏日本」化する地域の側では地主層の保守性も要因であったことなどが理解されたと思う。……大局的にみて、「裏日本」は日本の近代化＝資本主義形成の一環であったと言える。そして、この地域は、社会資本整備の大幅な立ち遅れにより工業化が進まず、資本主義発展のための安価な労働力と食糧の供給地域として位置付けられていくのである。」

本書を読み通すとき、もうひとつ留意すべき点がある。それは本書が早稲田大学授与の博士論文「近代日本成立期の地域と政党——『裏日本』化する新

潟県の場合——」の前半の第1部にあたり、後半の第2部は『近代日本地方政党史論』（芙蓉書房出版、1996年）としてすでに出版されていることである。こちらについても関連して言及したい部分があるが、すでに本誌第706号（1998年1月号）に宮地正人さんのがっちりとした書評があるので、それに譲ることにしたい。

紙数に制約があるので本書の内容紹介はこの程度にとどめ、以下次の3点を評価として提出することにしよう。第1は本書によって「裏日本」に関する科学的研究の土台がはじめて本格的に構築されたといっても決して過言ではない。千葉徳爾を先駆的業績とし、以降の地方史研究も含めていねいに先行研究の整理をした上で（「課題と方法」）、「裏日本」という言葉の出現の意味を探るために、第1章で中等教育用の日本地理教科書を約120例も検討している。そして日露戦後としてきた千葉らの見解を修正し、「裏日本」という語が自然地理上の意味で1895年頃から登場し、人文地理上の地域格差の意味としては1900年頃から使用され始めたことを明確にしているのである。

「裏日本」という語の初出にこだわりつつ行っている緻密な検討作業には説得力があり、本書を初めての本格的「裏日本」研究というゆえんでもある。本書をよりどころとすると、20世紀前後の「裏日本」の使用例をより多く検索したくなるのは評者ばかりではなかろう。たとえば、同時代に都市と地方の両方の社会を最も執拗に観察し続けた横山源之助、彼は「裏日本」の典型富山県魚津の出身で1886年に故郷を出奔して上京し、やがて周知の『日本の下層社会』（1899年刊）を著しているが、裏も表もよく知る立場であった横山は「裏日本」をどう見ていたのかといった点は今後の研究対象となろう。もちろんそうした論及の欠けていることを指摘して、本書の評価をいささかでも下げようなどと考えているわけではない。本書が今後の「裏日本」研究の方向性を明らかにした点の一例を示したに過ぎない。

第2は、本書のキーワードになっていると指摘した「地域格差」をめぐる問題である。この言葉を本書がどのように取り扱っているか、その代表的な使用例を少し紹介しておこう。

まず、第2章では道府県別人口移動の状況进行分析し、「北陸地方全体が人口の停滞・流出地帯となる1890年前後に「裏日本」化がはじま」ること＝地域格差の進行と捉える。この時期の人口移動を統計的科学的に把握するのはなかなか困難で、道府県別がせいぜいであり移動先も推定しかできないが、一応全国的検討の中での自己主張はなされているといえよう。第3章では全国的な殖産興業政策の展開をみたらうで、「太平洋側に厚く日本海側にきわめて薄い国家資本・財政の投資であったこと」、これに加えて「民間資本投資を呼び込み、地域格差」が「はっきりと形成」されたことを論証する。第4章では「官立高等教育機関」の設置状況を取り上げ、それが「その地に存在するか否かは、地域格差の形成に予想以上の影響を与え」と位置づけ、「裏日本」における「絶望的な地域格差構造の成立」を分析するのである。

以上が本書の地域格差の特徴的な認識とすると、いずれも人口流出の多寡、投資額の大小、教育文化の先進後進という、どちらかというとそれぞれの量的比較がメインとなっているように思われる。

少し論ずる角度を変えてみよう。この地域格差という用語は、少なくとも現代日本においては優れて社会科学的な語意を発揮している。そこで問われている課題は本書を意識しながらみると、どのような指標で格差を把握するか、地域格差と地域開発の史的展開、といった諸点を内包する。後者の問題からすると「裏日本」の地域格差が歴然としたのは戦後の高度成長期を経過する中で、それは地域の過疎化、環境と開発問題としてわれわれの眼前に克服しがたく横たわっている。過疎化はたんに人口減少などという次元を超えて、地域の健全なる社会生活を根底から破壊しているし、格差縮小を目的とした大型の外部資本による「開発」政策は、より一層の格差拡大と自然環境破壊をもたらしているのが現状である。そうした地域におもむくならば、誰の目にも質的な格差がはっきりと映ずる。

それを地域格差の典型と設定するならば、近代日本に現れた「地域格差」は産業革命にともなって生ずる農工間・鉱工業間の不均等発展を反映した単なる地域の不均等発展の一形態ではなかったのか、と

いった疑問も生まれる。その意味では、地域格差という言葉に本書はもう少し立ち入った吟味をして、指標をめぐる歴史学としての厳密な議論も必要としたのではなかろうか。そうするならば地域内の「地域格差」も当然視野に入ったと思われる。「裏日本」が現在死語となったのはそれが地域差別用語であるとともに、この地域が「裏日本」でひと括りにできない多様性を持つに至り、地域論として「時代遅れ」となったからでもある。南北に長い新潟県を同一地域で把握することは困難であるし、新幹線導入を象徴とした新潟市域とそれから取り残された山間部を同次元では語れない。評者の居住する石川県では事態はより明瞭で、金沢市域と能登半島先端部・白山麓とは地域格差が厳然としている。本書の立場に立ったとしても、「裏日本」地域を県一本で論じてさしつかえないという論証はどうしても求められる。こう考えてくると、「ヒト・モノ・カネの移転システムが、表と裏の明確な対照性をみせつつ形成され」（古舘忠夫『裏日本』岩波書店〔新書〕、1997年）た、と具体的に述べる見解により親近感を抱く。

ところで、本書の第3・5・6章は「裏日本」社会の状況・姿に関してわかり易く叙述しており、特に新潟を取り上げる第3・5章は読みごたえがある。これが3点目の評価である。そこでは「殖産興業政策の地域分布」を全国的に俯瞰しつつ「新潟県下の産業基盤整備状況」を検討し、具体的に築港・道路・鉄道への投資の薄かった状況を考察する（第3章）。さらに「米中心の経済」とそれを支える「地主王国と保守主義」を一体として捉え、その保守主義が「教育・文化の不振」をもたらしたと説く。そして「裏日本」化を「加速する人口の流出」を代表的表象として明らかにする。最後にやや言葉足らずで、著者自身も述べるように別著『近代日本地方政党史論』を合わせ読む必要があるが、新潟県民の租税負担額が比較的高額にもかかわらず、税の地域的還元が少なく、政治活動の不振＝「裏日本」化が招来したとする（第5章）。2章とも新潟県の歴史について知識が乏しくても、納得しうる内容となっている。

山陰の検討が補論的で、「福井・石川・富山の諸相」なる分析が欠如していることを指摘せざるを得

ないが、それは必ずしも阿部の責任ではなく、評者も含めた当該地域の近代史研究の弱さといってもさしつかえない。逆の視点で見るとすれば、著者の阿部は別著も含めて新潟県の近代地域史研究の面で大いに力を発揮しているといえる。それは佐藤誠朗が提唱した課題（「地方における近代史研究の役割と意義」本誌第320号、1967年1月号）への阿部なりの回答であり、さらにいえば、「裏日本」「地域格差」をキーワードとして、地域史研究をどこまで一般化できるかの試みでもある。その点では、本書がそうした研究の現段階のひとつの到達点を示したと評価する次第である。

（日本経済評論社、1997年10月刊、四六判、312頁、3200円）